



洋学文庫  
文庫 8  
C 128





庚午年三月十三日

暴瀉須知 附名義

吐春 蘇詞 蘇

暴瀉 實 口 共

附名義

栗園 莖 田 共 主 眷



明治三十年五月刊

栗園淺田先生著

暴瀉須知 附名義

如春病院藏



暴瀉須知 附名義

栗園淺田先生著

曩者奉官准。與同志十數名。設病院於淺草  
森田街。名曰如春。推栗園淺田先生為院長。  
歲所瘡不下數千人。其上鬼錄者。不過十數人。  
豈當倉生之幸。實副我儕之望。近世有稱  
虎狼痢一種疫癘。連年流行。為之橫天者。不知  
其數。其後如驟雨。吾等先兆。其死如電。過不能  
以一瞬。以彼醫家倉皇狼狽。不知其不措。況於  
病家乎。先生深有感於斯。乃著治瘟編。暴瀉  
須知等書。既刊於世。去歲又著虎狼痢考。一



編。其書自古今之治療。至預防避病之法。無不  
舉盡矣。夫先生日夜診脈投劑。無暇及他。然而  
有此舉。其用心於蒼生。豈不親切愷切乎。生民  
之受賜。蓋有不可量者焉。於是與同志。共議於  
從其志。因輯二書為一編。刊以普施於世。凡讀  
是書者。常記之心。以得免橫天之慘。則可謂成  
我濟之素志。謂歐州治法。如別無他道。則  
隘矣。是為序。

明治十三年五月

井上榮三識

信

亮田大鴻信書

田

暴瀉須知

栗園淺田宗伯著

余按の説疫及瘟疫の彙編委く見也ふて實は急速恐ろる病あり俗は出るりと

云も卒倒の義あり虎狼痢の萬病回春霍亂の条あり故は其治

法亦急卒に施さすは救ひ難き事多し益は病因二道あり其

初頭重く或は痛く風を惡み手足たるく或は筋強なり或は

痺する搦して水瀉二三行宛あらむもの表より感して緩き

症あり早く葛根湯と五苓散の類を服して發汗せば發汗

症あり早く葛根湯と五苓散の類を服して發汗せば發汗



の效徹とれば下利漸止とのあり若緩症とくゆりせす  
る時ハ忽嘔吐厥冷脉絶の証を發するものあり又一種た  
腹中雷鳴して傾盆の如く下利するものあり氣分格別か  
りりふれども下る度小肉脱して目も陷り鼻も尖り其雷  
鳴終ハ胸膈の中より突きぬけやうふ下利して忽ち  
嘔吐を發するやう是ハ至く急症とて片時も油断をへ  
ぞ治法黃連湯生姜瀉心湯の類を頻に服し温覆自汗出る  
かふとべし  
或人横濱して佛蘭斯人おれら病の治方を傳ふやう  
生姜瀉心湯は桂枝芍薬甘草湯をかるものなり香港など  
にても専ら漢方を用  
ゆりを見らるべきあり 若忽ち嘔吐を發し煩悶するものハ先づ丁  
子枯礬等分細末目方五分を水にて服さべし  
此方ハ小兒の  
やてを治す方

あつ今活用  
して效あり 後消暑飲を用也 半夏茯苓石羔  
甘草生姜五味 藥汁納らるもの  
ハ少く冷服とべし若し吐利とも納りて煩渴を發さ  
るものハ竹葉石膏湯白朮湯等を用也べし若し吐利  
止く二三日を経ても渴止む舌胎ましく厚くあり或ハ  
黒胎もあり煩悶するものハ熱毒の内鬱あり早く大柴胡  
湯 病胸に専ら  
なるもの 調胃承氣湯 病腹に専ら  
なるもの 小く下とべし若し  
等閑はる時ハ顔色赤くあり或ハ惣身赤斑を發し或ハ  
醉人の如く夢中ふたり終は死するものあり又消暑飲を  
用ても吐利一二日止む兼るものあり橘皮藿香二味水煎  
冷水に浸し用て止むあり虎翼飲とて止むあり  
半夏茯苓  
橘皮生姜



四味を伏竜肝水少く煎じるとあり 吳茱萸湯の症もあり撰用をべし一老医

の傳は下利煩躁甚しきもの梔子白朮茯苓三味淡煎用

て驗ありと梔子の隨分用あり場合あり吐瀉後心中苦煩

老く悶乱するもの黃連解毒湯黃連黃芩梔子黃柏四味を淡煎して用

ゆる時の速効あり但一瞬は吐利煩躁するもの吐利止て

も煩悶ますく甚しきものハ藥効立ぬ内は絶命を實に

恐るべきの甚しきもの又一種吐利せむ悶絶するもの

あり是ハ霍乱の乾霍乱あるが如く疫毒の劇きものあり

早く走馬湯を用ゆべし杏仁二十粒巴豆五粒絹子包ミ打碎き熱湯にて振出り用ゆ此藥を

吐瀉治くものあり其後の証は隨て藥を投じべし又轉

筋甚しく俗は六むら七轉八倒するものあり木茱湯と木瓜吳茱

薑塩少くを加へ水煎此方ハ元脚氣の某をれども衛生家寶は四片金と名け霍乱轉筋は活用して用ゆ外は塩湯を

布に浸し蒸じとべし又手足強直するものあり

桃核承氣湯加附子効あり此三種ハ肩或ハ腕脚を切りて血

をとふもよし其内良医を招きて治方を謀るべし今唯一

時救急の治方のことを書するものあり蓋し此證一種熱

悪の疫気あるハ霍乱の如く參附を用ゆるを禁む西洋の

阿片等ハ猶更の事あり崎魯の医笠戸怒節曰壬戌年麻疹後此証流行したるも熱瀉多く冷瀉至て

少くあり故に西洋傳習の医阿片を用て皆敗北し此地俗尚ハ一術

あり湯をその冷水を強飲し又ハ冷水に浴させ全活するもの多し

と熱厥の徴まず明多世医厥冷脉絶は眩して石膏を恐る者あり



是ハ熱厥といふこと知らざれば憫笑すべきもの至りあり又越前をいと同病ハ心得るものありたゞハ痧病トて其病状漫遊雜記ハ悉く見ゆ暴瀉ハ痧と異あり混治せざるべし亦ちあふ相辨むることあり

葛根湯 五苓散 黃連湯 生姜泻心湯 竹葉石膏湯

白虎湯 大柴胡湯 調胃承氣湯 桃核承氣湯

以上九方ハ傷寒論ハ出て世人普く知る處あり故ハ別ハ録せず用ゆふ臨て急ハ藥舖ハ調合させ服せし

世上此病預防の藥種々あれども格別の成效を見せ反々香竄元燥の劑を常服せらるゝのハ病ハ臨みく對症の藥効を

奏し加し況や外常ハ妙子泥發泡等を施し内ハ人參附子阿片を服せらるゝの實ハ愚の至りあり唯惡邪を辟るハ蘇合香圓を服し暑熱甚しき時ハ五苓散を服し其他攝養を専らふべきハ今一二を左ハ録せ

醉飽を節ふべきハ又饑渴を忍ぶべきハ屢暑熱と胃ハ舟行輿走を極むべきハ強健ハ任せ洵りハ勞働作力せざるハ胃力を損ト感招しやナリハ深夜味爽風露を衝て遠行を極むべきハ頻數閨房ハ近き下元を損むべきハ雨水を服す極むべきハ霧雨ハ浹す極むべきハ醉餘浴后裸體ハ風處ハ臥すべきハ菓實并諸冷物を食す



一四  
廻るに諸港津波の地尤行も也且猥り小蛮客舟夫  
小應接其氣を受廻る次

以上其大禁を記すの<sub>と</sub>其他患者多き家<sub>に</sub>来訪する時ハ  
必<sub>に</sub>飲食<sub>を</sub>し<sub>て</sub>胃氣を吐<sub>す</sub>香竄の藥を帶て邪惡  
の氣を壓する<sub>に</sub>一<sub>に</sub>凡此病ハ天地間一種熱惡の氣<sub>に</sub>感招  
せらる<sub>る</sub>れバ其病室尤風氣の通じ<sub>る</sub>やうふ<sub>し</sub>且辟  
惡の物を薰き清淨靜養と<sub>す</sub>し然らざれば其邪氣傍人  
に傳染して流行甚<sub>し</sub>し<sub>に</sub>不<sub>至</sub>る<sub>あり</sub>故<sub>に</sub>憐むべき<sub>に</sub>役  
舎<sub>の</sub>瀟<sub>の</sub>患者あり小屋<sub>にて</sub>風氣通せず貧困<sub>して</sub>穢  
濁多<sub>し</sub>ゆ<sub>ゑ</sub>一人感<sub>じ</sub>ら<sub>る</sub>と<sub>す</sub>は連舎同房<sub>に</sub>傳染<sub>し</sub>且<sub>に</sub>医

藥<sub>を</sub>さ<sub>ら</sub>ぶ<sub>る</sub>が<sub>ゆ</sub>ゑ<sub>に</sub>多<sub>分</sub>死<sub>に</sub>至<sub>る</sub>あり余嘗て病院を營  
し<sub>て</sub>是<sub>を</sub>救濟せんと欲<sub>せ</sub>れども微力<sub>あり</sub>し<sub>に</sub>其志<sub>を</sub>達  
す<sub>る</sub>事<sub>あり</sub>と<sub>す</sub>世の君子<sub>は</sub>れ<sub>を</sub>愍<sub>み</sub>病院を營<sub>し</sub>て  
医藥を施<sub>し</sub>玉<sub>に</sub>窮民の大幸<sub>あり</sub>と<sub>す</sub>過<sub>ぎ</sub>と<sub>云</sub>



古呂利考

按に古呂利ハ、萬病回春霍乱の一名虎狼病と云より出たりと云、又西洋所謂虎列刺ノ轉語（えんご）と云、説あまどり、皆附會（ふかい）信（ま）ざるふ  
足らば古呂利ハ本皇國の俗語にて、卒倒（そつとう）の義を云て古より早く  
病（びょう）稱（な）し來るとなり、元正間記云、元祿十二年の頃、江戸より古  
呂利と云病はやり、今月流行も、早く南天の實と梅干を煎（せん）して  
吞（の）ハ、其病を受けむ、左もちけむ、そろりと煩（わづら）ひて、古呂利と死  
まきて、江戸中南天の實と梅干を煎（せん）して飲（の）と云、此事申出せしハ神  
田須田町の八百屋惣左衛門と云者、去年大坂より、多く梅干を仕込置  
し處、今年上方の梅干きれて、一向も下らば、あれも依て、我梅干を高



直りて、賣らんや、かるとを言出しけるも、遂に官に聞へて八丈  
島へ流さるると云、又古老の話も、昔古呂利より、数万人死して  
葬るゝ能はず、官因て水葬の令を下すと云、閑窓瑣譚云正徳享  
保の年間の實録を記せし書も、正徳六年の夏、熱を煩ふ病人多  
く、一ヶ月の中に、江戸町々より死する者、八万余人及び棺をこ  
らるる家も、間に合はぬ酒の空樽を求めて、亡骸を寺院へ葬す  
る墓地埋む所も、けしき、宗體も拘らぬ、火葬あらざる、不納と云、  
依て茶毘所々も火葬せんとせし、棺桶の數限りも、積重  
て、十日二十日の中より、火を貯るとならぬ、其到来の順に茶毘せし、  
日数をもちるか、経ざるも、能はざる、是も於て貧者の亡骸、如

何ともせべきやうあり、町所の長たる人々も、世話行届兼て公廳  
へ訴へ申せし、夫々の御慈悲を賜り、寺院に仰付られ葬  
り難き亡骸、回向の後、菰を包み、舟に乗せて、悉く品川の沖へ  
流し、水葬せしめられしと云、考ふるも、正徳六年、六月廿二  
日に改元ありて、享保元年となまり、彼の明暦三年の火災も、十  
万八千人の焼亡、當時猶言傳へて怖る事、享保元年の天行病  
も、数万人の一時に死せし、後、傳て言者のるき、火難と  
違ひて、書留し事のあるやと、云々、又此疾正徳年間、鎮西に起り、  
小児の感冒最多く、漸次流傳して、尾州の地に及び、大人も適感する  
者あり、人呼て早手と云之を颶風の猝然として至るに比する也、爾



後筑の前後年々行ると云と、今時医談及筑人鷹取遜菴の小兒暴  
痢新考も詳お見たり、其後甚く行るとを文政壬午の秋と凡、瘟  
疫論發揮云、壬午之疫其初自朝鮮傳于吾西州、歷山陰、迨浪華無  
論老少強弱、闔戶傳染、勢如破竹、死者日三四百人、好生緒言云、壬午  
癸未間、西州天行病、水泻二三行而目陷鼻尖云云、是なり、時還  
讀我書云、文政壬午の秋末冬、初浪華も三日古呂利と称する  
病流行せり、初ハ鎮西より起て、中國に至り、浪華も及  
び、京師も、偶々病者あり、其症初起卒も惡寒、續て吐  
泻甚く、或ハ胸膈へ迫りて急なるハ日を出さ、緩なるハ三日許ハ  
して斃る故かくハ名けりと也、浪華もてハ甚多く沿門闔戶死にま

者ありと聞けり、導水鎖言も三日坊の類なるべりと云へり、何れ  
霍乱の一種までもあるべきや、百々漢陰ハ増損理中丸の症なりと言  
送れり、けりも然るべし、云々、此時ハ伊勢路も流行して江戸も及  
びざるなり、其後安政五年戊午の秋ハ長寄より始りて、山陰南  
海を経て、天下も遍く、其中江都甚く、初冬の頃ハ奥羽まで傳  
播し、雪天も至て初て止むと云、喜多村栲窓翁曰、安政五年戊午の  
秋、都下古呂利と云病流行き、即医通説く所の番沙の如し、八月  
八日、伊藤宗益朝四時下利して昏瞢、七時に斃またり、翌日同家婢  
も死す、隣家田中彦七ハ年六十も七日も死せり、近街死者相踵き、下町  
邊ハ最多し、其初ハ長寄より、漸々西國へ傳り、大坂最甚し、東



海道原吉原邊闔境皆斃と云傳言咬吧の邊甚多死を、英魯人其病を避て崎魯に來る、其船中二三十人、此病に嬰て崎魯に上陸せり、其より傳染する所と云へり、予の考より、古の尸注の種も、飛尸遁尸の類ありん、中惡鬼擊と云り、此類症あり、医通の治方の迂緩あり、予別考あり云々、是歳の古呂利ハ、江都最甚しく、斃まる者男女併せて、武家二万二千五百五十四人町家二万八千六百八十人、實に棺も給まると能り、茶屋所も宛も酒舗の空樽を積累するが如く、適ハ数日の間、蘇生せしものも有と云、享保以後の大疫と云べし、其翌年己未又流行し、其後麻疹と併行、最劇く、ことに繼て、年々断せし、近歲

は遠て時々甚く、人民を損まると、其数を知らず、医たる者尤宜く心を悉して審察し、本を探り源を尋て、救活せしめんあるべからん、然るも、享保の症ハ、医書未だ論載する者を見ず、文政の病ハ、特り浪華西田尚綱耕悦と云人、雜氣病按と云書を著して、悉く論せり、又津山の宇田川氏も西洋の説を翻譯し、甘汞を用ることを述ふ、安政の時ハ、西洋の著述翻々や、世に出つ、然まども、病源治療一定の説あり、漢科に至りて、僅に一二部の小著あるのみ、余之を漢土の書小考るに、吳震芳の談往に、所謂有棺無棺九門計數已に二十餘萬と云、王庭が痧脹玉衡の序に、所謂余在燕都、其時疫病大作、患者胸腹稍滿生



白毛如羊、日死數千人と云りの、即此証より皆明の崇禎十六年癸未の歳に行はまゝなり、其後清の道光元年子大に行はる、汪期蓮瘟疫彙編云、麻脚瘟其症脚忽麻木、肚腹疼痛吐瀉交作、朝發夕死、道光元年金陵患此者甚多、医林改錯云、道光元年歲次辛巳、瘟毒流行、病吐瀉轉筋者數省、京師尤甚、傷人過多、貧不能葬、埋者國家發帑施棺、月餘之間、費數十萬金、醫學實在易云、庚辰辛巳歲、吾閩患此而死者不少、然皆起於五月、盛於六七月、至白露漸輕而易愈、且庚辰入夏大旱而熱甚、人謂病由熱逼、辛巳入夏大澇而寒甚、人謂病由寒侵、而兩歲病形如一也、又嘉慶戊午夏、夏行はまゝなり、醫學實在易云、嘉慶戊午夏、泉郡王孝廉患

痢七日、忽於寅午之交、聲微啞、謔語半刻即止、酉刻死、七月榕城葉廣文觀鳳之弟、患同前證、來延自言、伊弟痢亦不重、飲食如常、唯早晨噤乾微痛、如見鬼狀、半刻即止、時屆酉刻、余告以不必往診、令其速回、看々果於酉戌之交死、是也、蓋此病吳又可以為瓜瓤瘟、張隱庵以為奇恒痢、陳修園以為風伏氣乘時而發之病、王清任以為瘟毒、其說少異、ハハハハハハ、皆雜疫の一種となす、ハハ、信從まゝし、劉松峯說疫を聞まゝる、雜疫名色ある者七十二症あり、何れも病來ること甚速なり、人を殺まると、亦最捷なり、吳又可曰、疫氣者亦雜氣中之一、但有甚于他氣、故為



病頗重亦名之厲氣雖有多意不同然無歲不有至于  
瓜瓠瘟疔瘡温緩者朝發夕死急者頃刻而亡此又諸疫  
之最重者幾百年罕有之證故難以常疫並論也確論と謂  
べし余戊午秋七月二十九日より九月十日に至るまで此病を  
療むること凡八百有餘人日夜寢食を忘るるに至る亦後年  
々經驗頗る獲る處あり因て其治驗を記して治瘟編暴瀉  
須知等を著す故に其治法ハ此の贅せり益此病歐洲に始  
り近世皇國に傳播して和漢とも古來未曾有の病の様  
心得たる俗醫多く唯歐西の治法を模擬して古哲の發明あ  
ることを知る者鮮し因て和漢の履歷を舉げ以惑者を辨明せんと云

附避瘟法

論語鄉人讎孔安國註云驅逐疫鬼郊特牲鄉人禴鄭玄  
註曰禴強鬼也謂時讎索室歐疫逐強鬼也然らば則周  
時既に驅疫の事あり屠蘇辛盤の属も避瘟の原始に  
古來其法を載る者鮮し張華博物志云漢武帝  
時長安中大疫宮中皆疫病帝不舉樂而使乞見請燒所  
貢香一枚以避疫氣帝不得已聽宮中病者登日並差本草  
綱目云降真香一名紫蘇香燒之避天行時氣宅舍怪異嘗  
有人為雷所擊幸而不死半身成黑色久而不愈諸医不  
能治之有異人教燒降真香薰之即變黑色而復常奇方



類編辟瘟丹此丹燒之能不染瘟疫久空房屋燒之可避  
穢惡乳香蒼朮細辛甘松川芎降香各等分為末棗肉為  
丸如芡實大遇瘟疫大作之時家中各處焚之即不染患  
一方加白檀末集驗方避瘟丸遇疫氣燒一丸即免傳染  
蒼朮一斤為末紅棗一斤取肉搗為丸如彈子大燒之說  
疫蒼朮降香反魂香除穢祛疫蒼朮降真香各等分共末揉入  
艾葉內綿紙捲筒燒之同一方天行時疫宅舍怪異并降  
真香有驗又云房中不可燒諸香祇宜焚降真諸香燥烈  
不可用降香除邪洗寃錄辟穢丹能辟穢氣麝香少許細  
辛半兩甘松兩川芎二兩右三味為細末蜜圓彈子大

久一云為妙每日一圓燒之一皆燒之邪在祛方一  
倘湖推書云亞細亞之地中海有島百千其大者曰哥阿島國  
人盡患疫內有名醫名依ト加得ト不以藥石療之令城內  
外遍舉大火燒一晝夜息而病亦愈矣按疫為邪氣所侵  
火氣猛烈能盪滌諸邪邪盡而疾愈亦至理也易曰燥萬  
物者莫熯乎火疫者邪火也猶龍雷之火以正火滅之是  
理不可不知焉一亦燒滅ノ最大者者也又嗅而之一辟  
者一者一吳崑疫瘡五神丸塞鼻法考云以疫氣無形由  
鼻而入故就鼻而塞之世俗人馬平安散一醫通點眼沙等一  
以一鼻一塗一瘟一を避一る者一ハ是理一なり又內服一之一を避



方あり、洗冤錄避穢方、三神湯、蒼朮二兩、白朮半兩、甘草半兩、右為細末、每服二錢、入鹽少許、點白湯服、又云、蘇合香丸、每一丸含化、尤能避惡、聖濟總錄、辟時疫溫癘、辟溫湯、甘草、大黃各二錢、皂莢一錢、右三味、用水二盞、煎至一盞、去滓、空心熱服、至脫下惡物為效、又辟瘴癘溫疫時氣、預服蒼朮散方、蒼朮三兩、右一味、為散、每服二錢、空心、井花水調下、仙拈集、辟疫湯、蒼朮三錢、三分、三厘、川芎八錢、五分、乾葛一錢、三分、六厘、甘草一錢、六分、七厘、薑三片、連鬚、葱頭三個、水二椀、煎八分、空心服、已病者愈、未病者不染也、とこれ也、又土地を清潔きよめする法あり、衛生寶鑑云、或有云、斯疾之召、或溝渠不泄、穢惡不

修、薰蒸而成者、或地多死氣、鬱發而成者、或官吏枉抑、怨讟而成之者、可於州治六合處、穿地深至三尺、開ひら亦如之、取淨沙三斛、實之以醇酒三升、沃其上、俾使君祝之、斯亦消除疫癘之良術と、こゝ也、又衣被を淨くする法あり、清會稽陶東亭惠直堂經驗方云、凡遇疫染、以初病人衣於甌上蒸之、則一家不染と、こゝ也、古人心を救濟し、盡く如此、而世医は知らず、却て説く避邪の法、洋医石黒氏の著書に始く具備せし、豈捧腹の至りありきや、



明治十三年五月廿七日御届  
同 年六月五日出版

著者 浅田宗伯

牛込區牛込  
横寺町  
四十一番地

出版人 山邊三子

浅草區浅草  
森田町七番地



五月廿七日出版  
年六月五日出版

漢國書局

出版人 山邊三子

牛心堂  
推中  
四十一番  
漢國書局  
森野七藏



